

思想史の基礎としての文献学：初出と現行版、原典と訳文の比較検討の方法と意義について

恒木 健太郎（専修大学経済学部、経済学史・思想史）

報告要旨

思想史研究において、対象となる思想家の著作についてその現行版だけをみて研究を進めるのは、非常に問題である。というのも、現行版において初出に何らかの加筆を行なっていることは、想定できるし、また実際にも行われているケースがあるからだ。また、初出段階と現行版刊行時でその問題意識は変化していることも珍しくはない。その著者が自身の問題意識を初出段階から現行版に至るまで首尾一貫したものとして説明しつつ、自身にとって認めうる変化をそこに記すことは、よく行われている。

ところが、この書き換えについて現行版でそれを行なったことを記さず、後で初出に遡って確認すると、微細だが極めて重要で無視できない箇所が発見されることがある。その際には、この書き換えという変化の意味を、初出段階と現行版刊行時の史的状況の違いを把握してその意味を解明する必要がある。ましてや、それが社会的に影響力の大きかった思想家や知識人であれば、なおさらその研究意義は増す。

書き換えという点では、日本思想史の場合、外国の思想の翻訳という問題が重要になる。そこでも、原典の伝えようとする趣旨が翻訳によって歪められていることも珍しくない。問題は、そのズレがいつどこで起きたのか、それによって極めて重要な論点を含んでいる可能性がある、ということである。ましてや、極めて重要な古典の訳書のケースでは、その受容において重大な影響を及ぼすこともありうる。

しかし、ここで思想史研究として重視したいのは、この誤訳ともいえるべき事態が歴史的な背景によってもたらされている可能性である。訳者（ないし引用者）がいかなる状況でその訳文を書きつけたのか、その動機を解明することによって、後世からみれば誤訳と判定せざるを得ない行為に出た理由が、個人的動機を超えた史実として評価しうるものになりうる。

以上のことにつき、ここでは事例として、私がずっと研究を続けてきた大塚久雄を中心に、彼の著作集と初出論文の違いが意味するところや、彼が受容したアダム・スミスおよびマックス・ヴェーバーなどの引用の仕方を検討しつつ、文献学的な調査と研究の方法とその意義をお伝えしたい。

参考文献：

恒木健太郎[2013]『「思想」としての大塚史学：戦後啓蒙と日本現代史』新泉社

恒木健太郎[2024]「戦時下大塚久雄のマックス・ヴェーバー批判：出口勇蔵との関連で」『専修大学社会科学研究所月報』733, 1-9（WEB 公開あり）